

氏 名 さい ほうとう
崔 豊韜

学 位 博士（芸術学）

学 位 記 番 号 博（芸）甲 第 39 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 30 年 3 月 16 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規程第 3 条第 3 項該当

論 文 題 目 名 東アジアの妖怪像
— 中国の妖怪像の変化と他国の妖怪像に
与える影響

審 査 委 員 主 査 山口 義久

副 査 北見 隆

同 櫻木 晃彦

1. 論文内容の要旨

本研究の要旨は以下の通りである。

「妖怪」はよく語られる概念だが、中国におけるその概念の厳密な定義をする研究はこれまでなかった。研究者たちは、あまり「妖怪」の概念の多様性について検討することがなかったからである。多くの学者は文献研究を手掛りにするため、古い時代の妖怪の概念の多くが研究に含まれてないことがしばしばである。本論文では、多くの古典の中の「妖怪」の概念から筆者なりに妖怪の定義を試みた。その際、できるだけ古代人の妖怪観に近づくことを目的とした。

古典を整理してみると、中国の妖怪の定義には異なる形態が3つあることがわかる。この3つの形態は同じ歴史時期の妖怪の分類ではなく、「妖怪」の歴史的発展に伴う概念の違いである。その3つの形態を、それぞれ異獣型、妖徴型、精怪型と名付けた。先行研究者の大部分は「精怪型」を核にして「妖怪」を研究しており、「異獣型」についての研究は数少ない。筆者は、「妖怪」の概念の歴史的な変化は、融合ではなく、「異獣型」から他の2型へ分化する過程であると考えた。

異獣型の妖怪は現実の生物と全く異なる特異生物のことである。多くは名称を有するため、その名称を知ることによって退治、命令することができると考えられた。形態は日常生活でもよく見られる生物の体の部分を組み合わせてできていることが多い。特定の生息地と習性を有し、一部に、災害の発生を前もって予報する能力を持つものもある。

妖徴型の妖怪は人間が異常と感じる現象のことである、災害の発生を予報する現象もそれに属する。現象であるため、固定的形態はない。日常と異なる事件、現象で未来を啓示する。現象（例えば地震の前の異変）そのものは人に直接の害を与えることはない。しかし、災害の前兆である現象に対抗する行動（祈り、祭祀）によって人が災害を阻止することもできない。

精怪型の妖怪は動植物あるいは物体の形をしている。変形したり言語を操ったり等の特異能力を有する特徴がある。そのため、人の姿に変化して人と交流をすることができる。存在する年月の長いことや修行等によって妖怪になるが、その正体が元々持つ特徴は変わらない。

古典を元にするると、妖怪の3つの形態の中で最初に確定されたのは異獣型である。原始時代の妖怪と神々の形象の形成過程は類似している。異獣型の形は、実在するあらゆる生物の形状の組み合わせでできるという特徴がある。神々の

形が時代とともにゆっくり人間に近づいて行くのに対して、妖怪の方は徐々に野獣の形になっていく。

秦・漢の時代には、「讖緯」の思想が流行することで、異獣型の妖怪の中の災害を予報する特性を持つ部分が妖徴型の妖怪になっていく。また、形状の組み合わせによって形ができる特性が消えていくに連れて、精怪型の妖怪も分化した。漢の政権が弱くなると共に「讖緯」の思想の影響が少なくなるため、六朝時代からの妖怪の認識は精怪型に集中していく。

しかしながら、精怪型の妖怪は六朝時代に確立されたわけではない。歴史の発展に沿って古典を研究すると、精怪型の妖怪は六朝時代から人情化と筆者が呼ぶ変化が始まっている。即ち妖怪が徐々に人の形象に近づいていくのである。そのため、人の姿に変化して人と交流をすることができる。更に人の思考パターンと価値、感情を持つ妖怪も現れた。このような変化は明清時期に頂点に達する。

さらに、明清時期には妖眚と筆者が呼ぶ妖怪が現れて、当時の社会に大規模な恐慌を引き起こしている。筆者はその時期の社会環境と研究者たちの研究結果をもとに、明清時期に妖怪の概念が変化した理由を考察した。結論として、この二種の妖怪の形成は、人間の感情が投影されたものだと推測する。投影されたのはすべての感情ではなく、恐怖と欲望の二種類の感情に集中している。

筆者は、文献に記載された妖怪の概念の変化を検証しただけでなく、妖怪の図像的形象も研究対象とした。両者を照合して文献の研究結果を確認するのが目的である。筆者が研究対象とした図像形式は以下のものである。岩絵、山海経図、漢王朝の画像石、明清神魔小説の挿絵、清朝末期から民国初期までの年画等である。妖怪の文献上の形象に対応する画像を探し出すために、それらを基にして、妖怪の図像的形象の造形パターンを解明したいと考えた。その結果、妖怪の造形方式に2種類あることがわかった。既に想像されている妖怪を表現する方式と、妖怪の文献上の特徴をもとにして描く方式である。

最後に、筆者は中国の妖怪が近隣諸国に輸出された後の受容と変容について考察した。日本と韓国を研究対象に、先ず中国と日本、韓国間の交流の歴史と交流手段（書物等）について調べた。次に日本と韓国の妖怪の概念が中国の妖怪の概念に類似するか否かについて検討した。結論として、日本と韓国には中国の妖怪の受け入れが明確にあり、中国の妖怪の一部がそのまま変化なく両国の文化に出現したことが判明した。

以下に、本論文の目次を掲げる。

序章

第一章 妖怪に関する先行研究

第一節 妖怪の全体的概念について

第二節 各歴史時期の妖怪の定義

第三節 妖怪の種類について

第四節 妖怪古典について

第五節 妖怪研究に関連する題目について

第二章 妖怪の概念とその変化 — 異獣型から

第一節 「妖怪」とは何か

一、「妖」と「怪」の単語の意味を分析する

二、[妖怪]を定義する

第二節 異獣を解析：特徴、連動と源流

一、特徴的属性と連動

二、異獣型の妖怪の源流

第三節 新しい変化経路：分化

一、分化と変異

二、妖怪が徐々に人間に近づく過程

説明図：妖怪の概念の分化過程

第三章 妖怪の図形的形象

第一節 文字の中の妖怪の形象

一、異獣型の妖怪の形象

二、妖徴型の妖怪の形象

三、精怪型の妖怪の形象

第二節 図像の中の妖怪の形象

一、岩絵、青銅器飾紋と山海経図の中の妖怪の画像

二、漢王朝の画像石の中の妖怪の画像

三、明清神魔小説の挿絵の中の妖怪の画像

四、清朝末期から民国初期までの「年画」の中の妖怪の画像

第三節 発見或いは創造 — 妖怪の造形模式

一、妖怪の造形形式：発見

二、妖怪の造形形式：創造

第四章 人情化と妖眚：明清時期の妖怪観

第一節 明清時期の妖怪の変化の特徴：人情化妖怪

第二節 明清時期の地方誌の中の特別の妖怪：妖眚

第三節 「交流」から見る妖怪と人間の関係

一、言葉で交流ができる妖怪

二、交流ができない妖怪

第四節 恐怖から欲望へ：明末清初における妖怪の社会的機能

第五章 妖怪は異国へ — 日本と韓国へ輸出する妖怪

第一節 日本にいる中国の妖怪 — 中日間の妖怪の交流

一、中日の間の文化交流

二、日本の妖怪文化

(一)日本の妖怪の源流

(二)日本の妖怪の発展の過程とその先行研究

三、中国と緊密にリンクする日本妖怪

第二節 韓国にいる中国の妖怪 — 中韓の間の妖怪の交流

一、中韓の間の文化交流

二、韓国の妖怪「トケビ」と中国の関係

第六章

一、妖怪の3つの形態：異獣型、妖徴型、精怪型

二、分化：妖怪の概念の変化の中心経路

三、人情化妖怪と妖眚

四、妖怪の文字的象と図形的象の造形模式

五、妖怪の概念の交流

六、異文化間のさらなる可能性を探る

引用文献・参考文献

付録 画像引用元

2. 論文審査結果の要旨

(1) 研究テーマの独自性

妖怪研究そのものは決して新しい試みではないが、本論文は妖怪の定義を求めて、先行研究を含めた多数の文献を渉猟し、それを踏まえて独自の考察を展開している点は、独創的であり、意義ある研究として評価に値する。

(2) 研究方法とその成果

本論文は、古典に始まる広範な文献をはじめとする文献研究を土台にしながら、それを裏付ける図像研究も行なっている点で、実証性を重んじた研究となっている。先行研究に対しても、その方法に対する批判を行いながら、異なる視点から考察することを選択しており、方法に対する明らかな意識が見てとれる。その成果として、妖怪の様々なタイプが融合して行ったという、従来の解釈に対して、異獣型と呼ばれるタイプが最も古く、そこから分化する仕方にくつつかのタイプが生まれたという、論者の新しい解釈を論じることができたことが挙げられる。また、図像的形象についても検討することによって、文献から得られた妖怪像に対する裏付けを得ている点も注目すべき成果である。

(3) 残された課題

論者の意図としては、中国における妖怪像の変化にとどまらず、その東アジア諸国への影響関係も明らかにすることを目指していたが、日本と韓国に対する影響について、中国の妖怪の一部が両国の文化に出現したことを指摘するだけに終わっている。これは問題の大きさを考慮すれば無理からぬことであるが、今後の研究の進展に期待したい。

3. 最終審査結果

以上、本研究の独自性、文献その他を活用する研究方法とその成果という観点から検討した結果、審査委員一同、一致して本研究が博士の学位論文の水準に到達していると結論づけた。